

令和 6 年 4 月 15 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11001

研究課題名(和文) 軽度認知症の重度化予防に向け早期から訪問看護の導入を支援する評価指標の開発

研究課題名(英文) Development of support indicators for introducing home-visit nursing care to prevent mild dementia from becoming more severe

研究代表者

落合 佳子(Ochiai, Yoshiko)

国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70611698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：軽度認知症に対し訪問看護を導入する評価指標の開発のため、要介護1認知症の3年間の経年的調査、訪問看護利用事例の個別調査などを実施し、以下の研究成果を得た。1) 訪問看護利用群は要介護状態の悪化が遅延し、認知機能の低下が抑制されるなどの効果が明らかとなった。2) 訪問看護師や介護支援専門員の質的調査から、軽度の段階から訪問看護が関わることで、認知症の重度化予防を含んだ健康の維持向上につながる事が明らかとなった。3) 経年調査及び事例の個別調査、ワークショップでの意見交換を通して、軽度認知症への訪問看護導入の評価指標を作成し、小冊子として認知症に関心を持つ方や家族等の地域の生活者に配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自宅療養する方とその家族の身近で支援する介護支援専門員等が、認知症の方に早期から訪問看護師が介入する上での指標になり、重度化の予防に繋がり住み慣れた地域での生活が継続され则认为。また専門職だけでなく、認知症に関心を持つ方や家族の方にもわかりやすいような小冊子を作成したことで、幅広く啓蒙することができた。

研究成果の概要(英文)：We conducted a 3-year longitudinal survey of people with dementia requiring level 1 care and an individual survey of home-visit nursing users with the aim of developing indicators for introducing home-visit nursing care for patients with mild dementia. The following research results were obtained.

In the group using home-visit nursing, the deterioration of the required level of care was delayed, and the decline in cognitive function was also suppressed. From the perspective of home-visit nurses and long-term care support specialists, it has become clear that the involvement of visiting nurses from the mild stage can help maintain and improve health, including preventing dementia from becoming more severe. Through longitudinal surveys, individual case studies, and opinion exchanges at workshops, we created indicators for the introduction of home-visit nursing for mild dementia and distributed them as a booklet to people interested in dementia.

研究分野：地域・在宅看護学分野

キーワード：軽度認知症 訪問看護

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者数は2025年には700万人と推計されている。認知症の社会的費用は年間14兆円を上回ると推計された（佐渡 2015）。そして要介護1は1年後に約25%が重度化したという報告もある（厚生労働省 2017）。社会的コストの増大を防ぐと共に、住み慣れた家での生活を支えるために、認知症等への重度化防止への取り組み（介護保険一部改正 2017）が開始された。更に重度化防止に向けて訪問看護による本人および家族への早期支援が示された（認知症施策推進大綱 2019）。しかし、訪問看護は医療処置がない場合や介護度が低い場合、軽度認知症者に導入が難しい（日本介護支援専門員協会 2012）。このように、訪問看護が軽度認知症を支援する必要性は示されているが、訪問看護の導入には課題があった。また、落合らの研究グループはこれまでに一時点の観察研究であるが、軽度認知症者に訪問看護を導入することにより本人の生活状況や家族の不安を軽減することを見出した（国際医療福祉大学学会誌 2022、厚生指標 2023）。しかしながら、軽度認知症者の重度化を防ぐための訪問看護の関わりについての詳細は充分とは言い難く、どのような指標で訪問看護を導入したらよいか不明瞭な状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、経年的前向き調査により訪問看護の有効性と、軽度認知症を担当する介護支援専門員や訪問看護師から重度化予防に向けた看護の実態等について調査し、軽度認知症者の重度化予防に向け早期から、訪問看護の導入を支援する評価指標を開発することである。

3. 研究の方法

1) 3年間の経年的前向き調査

A県とB県の居宅介護事業所1194カ所の管理者に、要介護1で認知症の利用者を担当する介護支援専門員に協力を依頼した。3年間の経年的前向き調査に同意した介護支援専門員152名を本研究の対象とした。調査期間は2020年9月～2023年9月。調査方法は、要介護1で認知症の利用者を担当する介護支援専門員に対し、半年ごとに無記名自記式質問紙での調査を行った。調査項目は、担当する利用者の介護度、介護サービス利用状況、訪問看護利用のきっかけ、現在の生活状況や家族の不安等とした。分析は記述統計を行った。倫理的配慮として、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

2) 訪問看護利用事例の個別調査

要介護1で認知症のある訪問看護サービス利用者を担当する介護支援専門員8名、訪問看護師9名を対象とした。調査期間は2021年3月～12月。調査方法は、3年間の前向き調査へ協力いただいている方の中から、改めて本研究の説明を行い、同意を得られた介護支援専門員を対象とした。訪問看護師については、介護支援専門員から紹介を受け、本研究に同意が得られた方を対象とした。介護支援専門員、訪問看護師は、個別に半構造化面接を行い、ICレコーダーに録音しデータ収集を行った。調査項目は、介護支援専門員の視点で「認知症在宅療養者が訪問看護の利用を開始後の、利用者や家族の変化」について語ってもらった。また、訪問看護師の視点で「認知症在宅療養者への訪問看護師の関わり」について語ってもらった。倫理的配慮として、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3) 訪問看護導入の評価指標の開発及び小冊子の作成

1) 2)の結果、及びワークショップ「認知症の軽度の段階から看護師が支えることを考える（2022年8月開催）」のグループワークでの発表等から、評価指標となる項目をピックアップした。更に、研究者間で議論を重ね、現場で働く専門家（認定看護師、主任介護支援専門員）より意見をいただき、評価指標を開発した。

小冊子の内容についても、1) 2)の結果、及びワークショップ「認知症の軽度の段階から看護師が支えることを考える（2022年8月）」のグループワークでの発表や現場で働く専門家（認定看護師、主任介護支援専門員）からの、認知症ケアのアドバイスを参考に作成した。

また、ワークショップ参加者へのwebによるアンケート調査を実施し、シンポジウムやグループワークを通して考えたことなどを記入してもらった。アンケート調査の倫理的配慮として、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) 3年間の経年的前向き調査

調査開始時、介護支援専門員が担当する要介護1で認知症の利用者152名の平均年齢は81.8歳（±5.0歳）であった。家族形態は、単独世帯、夫婦のみの世帯が83名（54.6%）であった。認知症に加え、103名（67.8%）が循環器系疾患も治療中であった。在宅介護サービスの利用は、通所介護の利用が最も多く102名（67.1%）であった。152名の内、53名が訪問看護サービスを利用しており（訪問看護利用群）、99名は訪問看護サービス以外の介護サービスのみを利用（訪問看護未利用群）を行っていた。

対象者全体の概要については、1年後、自宅で生活する対象者は133名（87.5%）に減少した。開始時には全員が要介護1であったが、1年後も要介護1を継続しているのは97名（63.8%）

であった。対象者 133 名の内、通所介護の利用が最も多く 94 名（70.7%）であった。2 年後、自宅で生活する対象者は 98 名（64.4%）に減少した。3 年後、自宅で生活する対象者は 65 名（42.8%）であり、施設入所や入院で調査対象者は減少した。3 年後も要介護 1 を維持もしくは改善しているのは、29 名（19.1%）であった。認知機能の低下で IADL は、日常生活全般において声かけや一部介助を要することが多くなった等の回答があった。

3 年後も在宅生活を継続できた 65 名のうち、訪問看護利用群 22 名、訪問看護未利用群 43 名であった。要介護 1 を 3 年間維持もしくは改善できたのは、訪問看護利用群が 11 名、訪問看護未利用群が 18 名、あり、訪問看護利用群は訪問看護未利用群に比べ、要介護度の悪化が遅延している傾向がみられた。訪問看護利用群は、訪問看護だけでなく約半数以上で訪問介護の利用も行われていた。また、訪問看護利用群は訪問看護未利用群に比べ、認知機能の短期記憶の思い出しや自分の居場所がわからなくなるなどの見当識障害の低下が抑えられていた。これらのことから、要介護 1 の軽度認知症の段階から、通所介護等だけでなく訪問看護も利用することの効果を示唆された。

2) 訪問看護利用事例の個別調査

介護支援専門員 8 名を研究対象とした。インタビューの方法は対面及びコロナ禍のため Web で実施した。インタビュー内容を質的に分析した。その結果、要介護 1 の認知症の方を担当している介護支援専門員は、訪問看護師が関わってからの変化として 3 つのコアカテゴリー「生活に連動した支援による体調安定」「家族を包含する連携の充実」「気分の安定化による社交性の回復」を抽出した。介護支援専門員は、訪問看護師が関わることで認知症も含めた健康面の安定を変化として捉えただけでなく、社交性の回復や多職種の連携の充実に関する変化もあったと捉えていた。これらのことから、利用者や家族の身近な存在である介護支援専門員の客観的視点で、認知症の軽度の段階から訪問看護師が関わることで、認知症の重度化予防を含んだ健康管理の維持向上につながることを示唆された。

訪問看護師 9 名を研究対象とした。インタビューの方法は対面及びコロナ禍のため Web で実施した。インタビュー内容は質的に分析した。その結果、要介護 1 の認知症の方へ訪問看護を実施した際に感じたこととして、4 つのコアカテゴリー「訪問看護を他者との交流の機会と受けとめていた」「会話を享受している療養者との交流」「療養者の体調と気持ちの起伏に伴うケアの拒否」「暮らしの環境と生活歴から療養者への理解」を抽出した。訪問看護師との交流や会話を重ねることで在宅療養生活における社会参加への望みと行動として捉えていた。また、気持ちの起伏に寄り添い暮らしを理解しながら看護を行っていた。これらのことから、訪問看護師が認知症の軽度の段階から関わり、適切なケアと社会参加できる環境を提供することで、認知症の重度化予防と生活の質の向上につながることを示唆された。

3) 訪問看護導入の評価指標の開発及び小冊子の作成

1) 2) の結果、及びワークショップ「認知症の軽度の段階から看護師が支えることを考える（2022 年 8 月開催）」のグループワークでの発表等から、評価指標となる項目をピックアップした。研究者間で議論を重ね、現場で働く専門家（認定看護師、主任介護支援専門員）より意見をいただき、認知症の軽度の段階における訪問看護導入の評価指標として、以下の 10 項目「認知症以外の病気（高血圧、糖尿病など）があって、治療の継続が必要である」「決められたように薬を正しく飲むことができない」「必要な時に病院に行くことができない、また必要以上に病院を受診する」「通所サービス（デイサービスなど）の利用を嫌がる」「一人暮らしで家族のサポートが難しい」「家族との折り合いが悪い」「人と上手にかかわることができない」「本人の不安が強い」「家族の不安が強い」「会話や笑顔が少なくなった」を抽出した。また、認知症に関心を持つ方や家族を対象にケアについてのアドバイスや訪問看護導入の評価指標を記載した小冊子 2000 部を作成し、関係機関に配布した。

また、ワークショップ終了後のアンケートでは、シンポジウムについて「軽度認知症の在宅療養者へ関わる訪問看護師の存在・役割」「軽度認知症の在宅療養者への訪問看護の必要性、有益性」についての理解が深まった。グループワークを通しては、「実際の訪問看護師の支援の理解」「家族・多職種の理解と導入の難しさ」「啓蒙活動の必要性」が課題として挙げられていた。これらのことからシンポジウムやグループワークを通して、軽度認知症の在宅療養者への訪問看護利用への理解が深まったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 落合佳子、秋葉喜美子、桑野美夏子、新谷繭子、王麗華	4. 巻 38(2)
2. 論文標題 認知症への訪問看護の関わりから介護支援専門員が捉えた変化 軽度の段階における関わりからみえたもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshiko Ochiai, Mikako Kuwano, Kimiko Akiba, Mayuko Shingaya, Lihua Wang
2. 発表標題 Three-Year Prospective Cohort Study of Dementia Patients Living at Home
3. 学会等名 27th East Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Lihua Wang, Yoshiko Ochiai, Mikako Kuwano, Kimiko Akiba, Mayuko Shingaya, Masaru Isoyama
2. 発表標題 Practice of Home Care Guidance on Dementia Conducted by Home Nurses
3. 学会等名 27th East Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 落合佳子、桑野美夏子、秋葉喜美子、新谷繭子、王麗華
2. 発表標題 要介護1認知症の1年後の日常生活状況変化～在宅介護の利用者を担当する介護支援専門員の調査から～
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 桑野美夏子、落合佳子、秋葉喜美子、新谷繭子、王麗華
2. 発表標題 認知症高齢者を担当する介護支援専門員が気になると捉える概念～要介護1を維持している療養者・家族に焦点をあてて～
3. 学会等名 第28回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新谷繭子、秋葉喜美子、桑野美夏子、落合佳子、王麗華
2. 発表標題 軽度認知症の在宅療養者へ関わる訪問看護師に関する理解や導入における課題～ワークショップのアンケートから～
3. 学会等名 第13回国際医療福祉大学学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 落合佳子、秋葉喜美子、桑野美夏子、新谷繭子、王麗華
2. 発表標題 要介護1の認知症への訪問看護の関わりから介護支援専門員が捉えた変化
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王麗華、桑野美夏子、秋葉喜美子、新谷繭子、落合佳子
2. 発表標題 訪問看護師が捉えた要介護1の認知症者の特徴～在宅療養者に焦点を当てて～
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 落合佳子、桑野美夏子、王麗華
2. 発表標題 認知症で要介護1の訪問看護の導入理由～3年間の在宅療養者調査開始時データより～
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王麗華、落合佳子、桑野美夏子、秋葉喜美子
2. 発表標題 在宅軽度認知症者の生活に対する介護支援専門員の認識
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 落合佳子、桑野美夏子、秋葉喜美子、王麗華
2. 発表標題 認知症を有する要介護1の前向き調査～在宅介護サービス利用者の調査開始時の特徴～
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>1) ワークショップ開催「認知症の軽度の段階から看護師が支えることを考える」 2022年8月20日（土）10時～12時 宇都宮市文化会館（会場及びWebによるハイブリット）</p> <p>2) 小冊子「認知症に関心を持つ方・家族の方へ 認知症かも・・・と気になった時」作成</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	王 麗華 (Wang Lihua) (20438774)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授 (32636)	
研究分担者	桑野 美夏子 (Kuwano Mikako) (10736052)	国際医療福祉大学・保健医療学部・講師 (32206)	
研究分担者	秋葉 喜美子 (Akiba Kimiko) (20835079)	国際医療福祉大学・保健医療学部・講師 (32206)	
研究分担者	新谷 繭子 (Singaya Mayuko) (90857046)	国際医療福祉大学・保健医療学部・助教 (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関